

平成28年度 第2回佐賀市まち・ひと・しごと創生推進会議 会議録

- ◆ 日時 平成28年12月21日（水）13：30～15：30
- ◆ 場所 グランデはがくれ ハーモニーホールA（佐賀市天神2丁目1番36号）
- ◆ 出席委員（敬称略、順不同。◎は会長）
溝上泰弘、香月道生、田上卓治、杉山利則、牛島英人、門出政則、井本浩之、
増渕治秀、中谷正一、糸山哲哉、永石亀、◎馬場範雪
- ◆ 欠席委員（敬称略）
小城原直、福井敏晴、貞富博文、富吉賢太郎

◆ 議事

- 1 開会
- 2 会長挨拶
- 3 議題
 - 1) まち・ひと・しごと創生における「To be」について
 - 2) 意見交換
- 4 閉会

◆ 要旨

- 1) まち・ひと・しごと創生における「To be」について
 - ・事務局から資料に沿って、総合戦略において掲げる「To be」について説明
(事前の委員意見を踏まえ、「豊かな自然と子どもの笑顔が輝くまち さが」を提案)

溝上委員

今日の To be についての案については、イメージとしてビジョンが見える形になり、一步前に進んだと感じている。

門出委員

めざすまちの姿はこれでいいと思う。しかし、このあとに基本目標の「経済の活力と安定した雇用の創出」などが続くが、めざすまちの姿を支える基盤づくりをどうするのかという議論も必要ではないかと思う。

牛島委員

この To be の「豊かな自然と子どもの笑顔が輝くまち さが」は、現時点でも既にそうだと感じている人がいるかもしれない。もっとも、さらに縁あるもの、他にないものをつくるということもあるかもしれないが、その点では弱いと感じている。私からは、3点申し上げる。

1つ目は、人口減少が話題となっている。乱暴な意見かもしれないが、人が集まってくるところは、未来があるということではないかと思う。やはり、未来があるから人が集まり、そこで何

かをめざしているのだと思う。まず、大事なことは、未来を創ろう、佐賀の未来を創ろうという意欲とビジョンがあるかないかということだと感じている。

2つ目は、前回、他の委員が言われていた「佐賀らしさ」が、非常に大事だと思っている。私が思う「佐賀らしさ」は、今までの時間をかけてつくってきた佐賀の時間、空間、歴史、文化や暮らしなどを、今後どのようにつくっていくかということである。特に佐賀の場合、農業を含め、「売る」よりも「つくる」というところが強みではないかと感じている。佐賀の場合は、ものづくりとそれを支える人づくりが大事であり、あえて言うならば、「もの」は「物」と「人」という意味での「佐賀ものづくり」が大事だと思っている。

3つ目だが、おそらくどこの土地でも同じようなことを考えていると思う。今回のめざすまちの姿の案については、当然そのとおりだと思う。しかし、昨今の様々な変化を考えると、これまでとこれからが同じだと思えない。佐賀の中で磨くということが大事だし、一方で外から呼び込むことも大変重要でないかと思う。佐賀から外に飛び出していくだけの強い意志とエネルギーがあれば別だが、外からの引き込みもないと難しいのではないかと感じている。観光においては、インバウンドという言葉がよく使われる。一般的には外国からお客様を呼び込む意味で使うことが多いが、観光だけではなくて、例えば、産業インバウンド、あるいは農業インバウンドなど、何でもいい。暮らしインバウンドでもいい。要はこれからの成長性のある日本を含めたアジアエリアの中の佐賀という捉え方をしていく方がいいのではないかと思う。少し話が大きすぎるかもしれないが、個人的な意見としては、国内の例えば福岡や東京から一人呼ぼうという時代ではないのではないかと感じている。むしろそれ位の尖った部分が必要ではないかと感じている。To be といえないかもしれないが、私は、「ひとづくり」「ものづくり」を強みとした「佐賀ものづくり」をとおしてアジアの未来に役立つようなことができないかと考えている。

会長

前回、To be と To do の2つがあり、まずは To be を考えようとなった。それは、今まであるものをそのまま残していくのか、あるいは佐賀らしさを守っていくのか、どのような姿が佐賀らしさなのかなというのを考え、そのうえで、それを守る、発展させるためにはどうしたらいいのかという To do の部分を議論していただいて具体的な戦略が出てくるということだった。そのため、ここでは To be ということで概念のような感じで捉えていただければありがたい。先ほどの貴重なご意見は To do の方で、具体的な方法を検討していければと思っている。

中谷委員

結論からいえば、これでいいかと思う。私が感じたキーワード、「豊かな自然」、「子ども」、「高齢者」、「穏やかに暮らしていく」、「郷土の誇り」といったキーワードが、しっかり盛り込まれていると感じた。

私は、福岡の出身であり、家族を福岡に置いて、佐賀に単身で住み、たまに福岡に帰るという生活をしているが福岡は住みにくい。例えば、車を運転していても、入れてもらおうと思ったら、嫌になるほどクラクションを鳴らされる。佐賀では、車を運転していて少し無理に入ろうとしても入れてくれると思う。無理に入る人が多いから、事故が多いのか分からないが、福岡に比べて

すごく暮らしやすく、ストレスフリーだと感じている。福岡にアクセスがよいので、佐賀でゆっくり生活して、通勤や遊びに行くのは福岡といった選択肢もあるのではないかと感じている。

会長

暮らしやすさ、働きやすさというのも非常に佐賀らしいというところだったかと思う。労働環境などもあると思うがいかがか。

永石委員

労働者の立場としては、競争よりも平等であり、「豊かな自然とこどもの笑顔が輝くまち」という案は、皆の笑顔が輝くような平等な社会、障がい者など、あらゆる人たちが、楽しく過ごせる社会というような意味も含め、このめざすまちの姿は合っていると考えている。

会長

平等な社会ということで、暮らしやすさとかに相通じるものがあるということだと思う。

杉山委員

私は富士町在住だが、富士町では子どもたちの笑顔というか、子どもがいない。村落の一番の問題であり、「豊かな自然」は間違いないが、それに伴って子どもたちが笑顔でいるということが、一番の活性化になると解釈すれば、「輝くまちさが」は非常にいいと思う。それをどう実行していくのが、一番難しいところだが、めざす姿としてはいいと思う。

田上委員

具体的な内容等については、別に押さえていくとして、テーマ、イメージとして「豊かな自然とこどもの笑顔が輝くまち」を掲げて、それに向かって具体的に動いていくわけなので、このテーマで非常にいいのではないかと思う。

香月委員

まとめ方としてはこうなるかと思う。大事なのは、賑わいといっても東京と佐賀の賑わいは違う。私たちが言う賑わいは、都会の賑わいとは違うということをきちんと認識しないといけないと思う。都市機能の充実についても福岡や東京とは違う。それなら佐賀では、何をどうやって、まちをつくっていくかという、本格的にコンパクトシティをやっていくにはどうしていくかという事だと思う。単に「自然」と言っても、資料には、「自然環境」、「水と緑」、「空」とかしか書かれていないが、もっとはっきり、田舎なら田舎、農地を守るなど、明確に言葉で示さないと、野放図にコンパクトシティをめざすと言いつつも、50戸連たんの開発制度により、市街地が広がり、農地を潰していつている。水路も本来あるべき形になっていない。「To be」はこのような形でしかまとめられないかもしれないが、取り方によってはいかようにも解釈できてしまう。もっと明確に、「田舎らしさ」などの言葉をもっと強い形で入れてもいいのではないかという気がしている。「こどもの笑顔」と言っても、もう少し切り込んで、「子どもが本当に健全に育っていく」

など、表現は難しいと思うが、もう少し明確な形ができないかと思う。方向性は間違いないと思う。

溝上委員

ビジョン、どうありたいかというイメージができて、次に To do の前の目標が出てくと思う。目標にするものには、一つは数値で表せるものがあり、もう一つは、もっと具体的な誰でも分かるような、明確な言葉で表していかなければいけない。そうして、数値の部分と数値にできない部分の目標ができる。その次に目標に向けて、誰が、いつまでに、何を、どのようにやっていくかという To do、いわゆる施策、手段を決めていくというステップになると思う。そのため、まず「こういうまちだよ」というビジョンを決めて共有する。今はその段階であり、描くビジョンが違くと目標も変わってくるし、方法も全然違うものになってしまう。まずアバウトでも、少なくとも方向性は、ビジョンを共有する段階だと思っている。そのため、次に目標を決めないと具体的にまだ見えてこないし、市民の皆様にも理解できないと思う。理解してもらうためには、次の段階で、なるだけ数値を入れられるものは、定量目標にし、言葉で分かるような、定性の具体的な目標を決めていくことが必要だろうと思う。

会長

総合戦略の目次に、各具体の手段まで書き込んだものを示されている。コンパクトシティ、子育ての環境、自然環境といったものが並んでいる。事務局に確認だが、「経済の活力と安定した雇用」、「市内への人の流れの創出」、「こどもを生き育てやすい環境」、「持続可能な地域社会の創出」という4つの基本目標が具体手段の柱になるのか。また、各々に数値目標はあるのか。

事務局（武藤企画調整部副部長）

To be が必要とのご意見を受けて、総合戦略の中に「あるべき姿」として方向を示そうとしているところ。次の段階の目標としては、すでに4つの基本目標を立てている。その基本目標の下に数値目標として、KPIを設定している。例えば、多様な雇用の機会の創出の場合、企業誘致による新規雇用者数として、1,250人をめざすということで、各基本目標の下に、施策に応じた、複数のKPIを設定し、成果がどうかということを、そのKPIをどうするのかというのがTo doにあたると思う。この総合戦略は具体的な事業のところを評価することによって、KPIの数値に反映していくという姿になっている。

会長

一応、基本目標ごとに数値がある。テーマとしての言葉は事務局案でいくにしても、もう少し踏み込んだ明確な言葉で何か書き込めないかという意見があったが、これについて、例えばフレーズの下に趣旨を書き込んだところがあるが、ここを少し明確に「佐賀らしさ」などの素材を入れていくという議論したほうがいいのか。それとも、フレーズ自体をもっと具体性が見えるような別の言葉にしていくかという整理になるかと思う。おそらく、フレーズが具体的にできればなるほど、To do の一つ一つを強調して、このフレーズに合わせてくることになるということもあるので、

概念的には、事務局案にしておき、その趣旨説明で少し書き込んでいくのはどうか。

増淵委員

まず、前回8月の会議の時に、違和感を持ったのは、4つの基本目標と、その下にある各施策、さらにKPIについて、どこのまちでも同じ目標で、同じKPIで、KPIを実現できたら、翌年は目標高めてやっていくという若干機械的な形になっていた。そして、それでいいのか、そもそも市としてどういうことがやりたいのかという話になってTo beを決めるようになったと理解している。

今回、めざすまちの姿について、事務局で委員の意見を集約し、キーワードも収斂されており、市の総合計画でめざす将来像とイメージも一緒だということで、そうだなと思った。

このめざすまちの姿の標語はさておき、今後、目標の下のKPIを同じような指標でやっていき、目標を達成することで、本当にめざすまちにつながっていくのかということところが次のフェーズだという気がしており、まちの姿の標語に細かく下部の言葉を入れると言っても、所詮は文章上の世界であり、市民とかで「こういうKPIを達成すれば少しは自分たちのめざしているところに近づいてくるな」というところをしっかりと議論していかないと堂々巡りになってしまうのではないかと、何年経っても実現できないのではないかと思う。

そのため、前回と今回の資料にある「主な取組」というところが、あまり内容は変わっておらず、多分、ベースとなるKPIの指標も変わらないのだろうと思う。

To beはTo beとして、今後の段取りとして、KPIとPDCAは変えないのか。例えば観光入込客数やコンパクトシティを実現することによって、本当にめざす姿に到達できるのかと感ずる。次のフェーズなのかも知れないが、そのような議論を進めていかないといけないと思う。

めざす姿は自分なりに何を数値目標にするのかと考えると、佐賀市に住み続けたいと感じている市民の割合などのアンケートの数字でしか調査できないだろうと思う。しかし、あくまでアンケートなので、どういう人にアンケートをお願いするのか、標本をどうするかによって変わってくるものであり、多分そうではないのだと思う。

だから、さきほどの標語について「今でもそうなっている」という意見は、そのとおりでと思う。しかし、これから人口減少が進むので、それを食い止めるためにどういう施策を打っていくかということが大切だと思ったので、めざすまちの姿がふわっとしていても、4つの目標を変えるのは難しいだろうが、これを前提としての、例えばそれぞれ各項目の中にある、こんなものをベースに指標を見ていくのはどうだろうかという議論をしてはどうかと思った。言うは易しで、とても難しいことであり、どこの地方公共団体も悩んでいることだと思う。市民と様々なチャンネルを使って議論し、「何となくそう、難しいけどみんなそう。」といった雰囲気醸成していくことがとても大事であり、エネルギーを注いでやっていかないといけない。そういった方向に皆さんと共に行けるよう形で取り組んでいきたいと思っている。

会長

前回は議論になったが、KPIをつくり、それを達成したからといって、良いまち、理想的なまちになるのかということ、今後、基本目標の数値目標とリンクしながら進め、場合によって

は、To be もこちらの言葉がよかったという話も出てくるかもしれないが、次のステップにいくという意見かと思う。

糸山委員

コンセプトについては、ある程度理解できるが、豊かさと言っても、世代によって、様々な感じ方があり、若い人、年配の方で全然感じ方が違うのだろうと思っている。また、福岡は、非常に住みにくいとの意見があったが、たまたま、私は佐賀と福岡の県境に住んでおり、特に住みにくいと思ったことはなく、どちらもいいところはある。

高齢化が進んで若い人たちが少なくなり、人口も3分の2程度、高齢化率が40%位になったときの姿を考えなくてはいけないと思う。そのとき、高齢者の意見が圧倒的に中心になっていくのだろうということもあり、もちろん若い人たちの意見も大事なので、バランスが大事ではないかということがある。

また、佐賀の場合は、大金持ちがそんなに多くいるわけではないが、持ち家比率が非常に高く、貯蓄や可処分所得が大きい世帯が多いということ、三世帯同居されている方も少なくないと思われることから、今でも充分豊かだと思っている人も少なくないと思う。

そのため、To do につながると思うが、これ以上何を豊かにするかということとは、物なのか、文化や教育などを伸ばしていくのかということになる。

このコンセプト自体には全く違和感はないが、目標の決め事として、将来、どのような世代、スパンの中で最終的な目標を決めていくかということが、非常に大事なところではないかと感じている。

会長

コンセプトについては良いということで、To do を掘り下げていくということだったと思う。

井本委員

人の幸せは、どのまちでも一緒であり、ビジョンを作るときには金太郎アメになるのは当たり前である。それをどうやって多くの人に共有していくか。一つ一つの To do ごとにキャッチをつけていけばいいと思う。例えば自然と言っても、普通は、ほったらかしていると思っているが、九州の里山は、耕作放棄地など非常に荒れており、人の手の入った本当に豊かな自然を、何らかのキャッチをつけてやるなどが考えられる。あるいは死ぬまで働けるなどであれば、そこにもまたキャッチをつけていくということも考えられる。そのように事業ごとに細かくキャッチをつけ、そしてKPIを達成していくということかと思う。KPIは、数値化できるものと、できないものあるだろうから、多くの方々が話し合える場所を作っていくと情報共有できないと思う。そういう場が出来ればできるほど、市民の中から自分のまちを何とかしようという方が出てきて、かえ難いまちになると考えられると思う。

会長

先日、ある保険会社の支店長が、夫人と来られて、市内に家を建てられていると聞いた。私は

とても驚いた。東京出身の人なので、どうして佐賀が良かったのか尋ねたら、分からないと言われた。しかし、人が身近にいることかと思う。都会にいても寂しく、孤独だったということで、そういうことがないと言われていた。

井本委員

例えば、福岡の大学へ行くと、誰一人挨拶をしない。うちの大学に来ると皆が挨拶をする。人と人の距離感が近いことは売りにできる。そして、それは日常性の発見だと思う。日常だと気がつかないことの再発見、当たり前前なのが、当たり前前ではことに気づく場所があればいいと思う。

そして、持続可能な社会という考え方をしっかり根底に据えておかないといけない。成長一点張りではダメのような気がする。「もったいない精神」などが、精神性のキャッチとして出てくると思う。そういうキャッチを一つずつ考えて事業を展開していけば、結構いいものになるのではないかと思う。

会長

すごく佐賀らしさがあるようなヒントが含まれている気がする。それでは、キャッチについては、「豊かな自然とこどもの笑顔が輝くまち さが」ということを、皆さんと共有したい。そして、これに基づいて、基本目標、KPIを含めた To do の部分、例えば、経済の活力と安定した雇用であれば、具体例は何であり、どういうキャッチ、施策があるのかということについて、今後やっていくようにして、To be は、これによければ決めさせていただければと思う。今後、やっぱり変えようとなれば、また変えてもいいと思っているが、とりあえず決めて、To do の議論を行っていくとさせていただきたいと思っている。

事務局（古賀企画調整部長）

補足だが、この戦略は国が出している人口問題研究所の 2060 年までの人口推計において人口が大きく減る見通しであるため、2060 年の人口を何とか減るのを抑えようと始まったものである。そして、5 年間の戦略を策定しており、次に策定する平成 32 年に大幅な見直しはできる。今回の To be については、この戦略の中に市のめざす姿を書き込むべきだということで、このタイミングで、是非入れさせていただきたいと思っている。To do については、4 つの基本目標の中で、どういった事業を展開するのか、どういった手段でめざす姿に持っていくかの具体的部分は、また後ほど議論いただければと思う。

2) 意見交換

- ・事務局から資料 3 に沿って、委員からの意見、主な取組内容について説明

会長

事務局に確認だが、本日は、あまり時間がないので、このことについては、これからずっと議

論していけるのか。

事務局（古賀企画調整部長）

前回の会議の中で、皆さんに To do のご議論をいただき、取り組めるようなものがあれば、我々がつなぎ役として担当部署につないで事業化を図っていくような話をしていたので、こういったものはどうかというご意見をいただいて、会議の中で合議、提案をいただくと、事務局としてつないでいきたいと考えている。ただ、予算編成のタイミングもあるため、いつ事業化できるかというのは、はっきり申し上げられないが、事業化できるものをこの場でつくっていきたいと考えている。

会長

そうすると、委員に議論していただきたい事項としては、例えば（1）の経済活力と安定雇用というテーマでは、どのような姿が佐賀にあるかなということを少し揉んでいただく感じで進め、そのうえで、市が受け止めるものがあればということにしたい。本日は時間がなく、すべてを議論できないだろうから、シリーズものにしていかないといけないと思う。今日はさらっと意見をいただくような形にしたい。

事務局（古賀企画調整部長）

事業としては、単年度で終わらないものも出てくると思う。中長期的なものも含めて、今後議論いただければと思う。

門出委員

大学としては、学生が就職で地元に残ることをCOC+ということで考えないといけない。佐賀はお年寄りが多いので、そういう人が見たら非常にいいが、20歳の人が見たら活気がない。だから、そういう産業つくるにはどうしたらいいのかという視点があって初めて、その上にいろいろなことが浮かぶ。

それからもう一点、佐賀大学に勤めて、福岡から通う40歳前後の若い先生が非常に多くなっている。そういう先生は、こどもが大学、高校くらいである。そうすると受験高校を福岡にという先生が多く、考え方に違いがあるというのを強く感じている。

若いこどもたち、大学生が働ける場所を作っていく、大学の中でも知恵を出して、もう少し産業を興していこうという活動をしている。

井本委員

全国的な傾向だが、大学で養成している人材と地域産業のミスマッチというのが非常に多い。例えば、北九州工業地帯だが、福岡北部の大学生が、そこに就職するかと言えば、していない。要するに職のミスマッチ、同じ工科系といっても全然違う。西九州大学の学生は地域の産業とのマッチング度合いが高いのでミスマッチとは考えていないが、佐賀大学の学生が地域の産業ともっとマッチングした学部構成の仕方も必要であり、一方的に社会だけに変化を求めるといった問題

でもない気がする。人材行政のあり方そのものが変わっていかないといけない。

具体的なことを言うと、駅前に学生が集まるエリアの意見が出ているが、北九州の自治体がやりだしたESDステーションというのがある。そのような試みを、例えば中学生くらいから施設を利用できるとしていただくと佐賀のことを一層知るようになると思う。そして、そこには企業や、商店のおじさん、おばさん、大学の先生も入っていくし、逆にそういった人たちが、また今度は生徒として、いろいろな学びを重ねて、佐賀に対する親和性が高まってくるという仕組み・装置を駅のバスセンターに作ってもらえると嬉しい。

それともう一つ、委員意見として資料に記載がある「医療・介護の公費日本一少ないまち」というのは、つい先日、新聞に載ったが、全国で西九州大学だけが、認知症の取組がブランディングの事業に選ばれた。おそらく、認知症の研究拠点になるので、そういったものを使ってもらえれば、認知症の疑いの段階で、健常者に引き戻せる。介護保険を使わなくて済むというところまで戻せるので、そういった取組を佐賀市と一緒にやれば良いと思っている。まだ、具体的には担当部局に相談には行っていない。実際に行動に移るところまでは行っていないが、一緒にやれば、佐賀発の認知症に関するコンテンツがあるという一つ目玉になると思う。

会長

是非、担当課と一緒にやってもらいたい。

産官学の取組の中で、佐賀市の目玉的なものとしては、バイオマス、IT系、IT農業などをやっている。

牛島委員

一つ目は、佐賀に新しい産業を創る、若者が住みよいまちなどの話が出ていたが、そういう問題意識を掘り下げないと、どうしてもミスマッチが起こってしまうという気がする。

それともう一点、特長を持たないといけないと思う。特長がないと人が来ない。目的化しないといけないというところだと思っている。昨今の変化は、必要としているところに人が集まり、物も動くということがますます顕著になり、それが広いエリアで作用している。佐賀に人が集まるのであればいいが、逆に吸い取られるということがあると思う。つまり、ミスマッチを起こさないように皆さんと掘り下げを検討する必要があることと、特長づくりが必要だということだと思う。

永石委員

私は、労働組合の役員をやっているが、最近は特に非正規雇用の問題が大きくなってきている。私の知人も20代後半位で、ずっと非正規を続けていたが、正規の職が見つかったということで、福岡に出て行った人が何名もいる。それで、産業界へのお願いだが、非正規の人の人材育成、特に研修制度の活用、社会人になってからのレベルアップが非正規の方は全くできていない状況にある。また、社会人になって取り残された人が随分、多くいらっしゃるの、そこをかさ上げしていかないと、正規の職ということで、佐賀から大都市圏へ人が取られてしまうのではないかと危惧している。

中谷委員

一つは、就職支援は欠かせない。それから、創業で新しく生まれるスモールビジネスをたくさん生んでいくと同時に、せっかく事業が上手くいっているのに、後継者がいないために廃業せざるをえないところを事業承継という形でいかに支援できるかを地場の金融機関としっかり連携して取り組んでいくべきなのかと考えている。

二つ目は個人的な話だが、例えば佐賀大学にたくさん来ている福岡出身の人たちに、佐賀に就職してくれ、佐賀に住んでくれといってもなかなか難しい。そうではなくて、U I Jターンで都会から田舎に戻ってくる人たちがいるが、そのような人たちは、佐賀でしかやれないことをやりに来た、あるいは自分がやりたいことが佐賀では実現しやすいということであるのではないか。つまり、目的を持って来ていると思う。佐賀として、一体何が提供できるのかということを考えて、佐賀ではこんなことができるということを伝えていけるのが重要だと思う。無理に引きとめるのではなく、やりたいことが実現できる佐賀をアピールすることが重要ではないかと感じた。

それから合計特殊出生率についてだが、子どもを産んで育てることが重要だという意味においては、共働きができること。2世代、3世代の家庭は非常に子育てしやすい、共働きもしやすいと思う。奥さんが働いてもお父さん、お母さんが見てくれる。そういうことができるのが、田舎、佐賀の良さだとすると、極端に言えば、仕事は福岡に行ってもいいので、住むのは、住みやすい、子育てしやすい佐賀という考え方もあるのではないかという気がする。

増淵委員

実際にどのようなことに取り組まれているかをお尋ねしたい。一つ目は社会全体で言われている待機児童の削減についてである。最近は福岡に人が集まっており、公共機関で看護師さん一人に対して何人の患者を看るという規制があるため、施設はあるが対応できないという状況であり、おそらく、佐賀でも同じことが起こっているのではないかという気がする。主な取組として、待機児童削減と書かれているが、実際に同じように佐賀でも待機児童がむしろ増えている状況にはないのか。現在、どのような状況なのか。そして取組はどうなっているのかについてお聞きしたい。

それともう一つは、社会全体で高齢者による車の事故が増えていることである。ましてや佐賀では一家に2台、3台の車があるのが当たり前で、車がないと生活しにくいと思う。だからこそコミュニティバスの運行だったりするのだと思う。さらには、コンパクトシティとなると思う。いわゆるコミュニティバスやコンパクトシティの観点というか、高齢者でも免許を返上しても、生活していく環境がどのように整備されるのかというのが知りたい。

それと3つ目が、医療介護福祉の公費についてだが、佐賀は病院の数もしっかり整備されており、何かあったときにしっかりと診てもらえる。東京だと近くの内科医院等では待たされるが、佐賀では、結構ずっと診てもらえるので、とても恵まれた環境だと思う。「健康寿命日本一のまち」ということは、さらに健康寿命を延ばすということだと思うが、医療機関などとの連携があると思うが、何か取組があったら教えていただきたい。

事務局（藤田こども教育部長）

佐賀市については、例年、どこの保育所でもいいから入りたいという方で待機されている数が大体 100 人前後いる。また、別に自宅や職場の近くの園を何園か指定されており、それで入れない方が約 150 人前後いるので、大体 250 人から 300 人程度が入れずに待機されている方がいる。今年 of 状況を見ても、去年並みの推移になってきた感じある。そのために、佐賀市では、幼稚園ばかりではなく、認可保育園、あるいは認定こども園が増えている。佐賀市では、保育機能をもった認定こども園が特出して増えている。そのため、施設の数では、認可保育園が 40 前後あったのが、こども園や認定保育園が約 90 となっており、施設の数では約 2 倍近くに増えている。しかし、一方では、それ以上にニーズが増えており、待機児童がなかなか減らないという状況になっている。今年 of 動きでは、特に 0～2 歳がほとんど待機児童の対象となっているが、現在、0～2 歳児でもいろいろな施設を改めて造っているところである。認可保育園の増築、あるいは新しく建てたりしている。今年度は、150 人ほど定員が増えるので、どうにか年度当初の待機数は 0 に近づくのかと思っている。ただ、これが 4 月以降、5 月、6 月と一年間を通じたら、徐々に増えて、結局、200 人以上の待機が出るという状況にある。

増渕委員

保育士は確保できるのか。

事務局（藤田こども教育部長）

基本的に、保育士不足は佐賀市も同じである。そのため、もう少し保育士が集まれば、施設は、2 倍近くになっているので、受入を確保できるようになってくると思う。

保育士の養成大学との連携もさせていただいているが、なかなか即効性のある策は打っていないというのが現状である。

増渕委員

潜在保育士を掘り起こす動きの議論が進んでいたと思うがどうか。

事務局（藤田こども教育部長）

潜在保育士については、県が人材バンクを創っている。そこに今まで保育士の資格を取得されて、現場を離れていた方を登録する形にしているが、なかなか登録者数が増えていない。あわせて養成大学にも潜在保育士の掘り起こしの努力をいただいているが、なかなか結びついていない。

事務局（武藤企画調整部副部長）

2 点目は高齢者による事故の削減の件である。高齢者の事故は新聞記事で大きく取り上げられている。その中でコミュニティバスが有効な手段であることも認識している。佐賀市では山間部の三瀬と富士にコミュニティバスを運行している。それと大和町の松梅地区には、予約すると家まで迎えに来るドアトゥドアの形のデマンドタクシーを、他の交通事業者に迷惑を掛ないようにエリアを限定して運行している。地元の要望も聞きながら運行しているが、なかなか乗っていた

だけないところもある。乗っていただいている地区は、自分たちの交通手段を守るために地元の方が一生懸命に努力されている。そうでない地区は、いつかは乗るだろうから、なくなったら困るが、今は乗らないという方が多く、運行を続けていくのは厳しいというところもある。このコミュニティバスは、高齢者の移動にとって重要であり、現在は山間部で運行しているが、今後、中心市街地や南部地区などにおいても運行を考えていくべきであるということで、検討をしているところである。

香月委員

資料の2頁目に「ほどよい田舎」と書かれているが、中途半端な田舎はいらないと思う。徹底的な田舎をめざすことが大事である。私は佐賀に帰ってきて、すぐに県庁の様々な会議参加したが、そのとき佐賀は田舎ではないと言って、非常にバカにされた。今、時代はそうではない。ヨーロッパへ行くと、都市と田舎とは、はっきり分かれており、そこには美しさがある。

もう一つは、治山治水、あるいは地球の温暖化の問題など、私たちが抱えている問題を解く鍵は、第一次産業にある。佐賀は、山や沖積平野、海がある本当にきれいな土地である。山、平野、海があるので、どう活かしていくかとなると、やはり一次産業を徹底的に磨いていくところだと思う。それが、「佐賀らしさ」につながるし、当然、産業にもつながっていく。「食」ももちろん入っているが、そういうところを総合的につくっていかないといけない。To be にとっても、そういった言葉がもう少し前面に出るようなものにしたいし、出来たらいいと思う。具体的には難しいが、そういうことで、皆に理解してもらえる形になると思う。

実際は、50戸連たん開発制度にしても、市街化調整区域の開発により、農地を潰している。建設業者は、次々に建築しているが、何も痛くもかゆくもない。彼らはそれが仕事なのかもしれないが、そういう問題を佐賀の人たちはもう少し共有化して、もっと田舎らしくしていこうというところもやっていかないといけないと思う。便利な田舎とほどよい田舎とは違うし、徹底的に田舎な方が、住みやすい、便利な田舎ができると思う。そういうところを皆で何か形にしていくというのが、「佐賀らしさ」ではないかと思う。

会長

土地利用計画あるいはそこでの一次産業の重要性を磨いて「佐賀らしさ」を出していくということだが、そのとおりだと思う。

田上委員

やはり一次産業が底辺にあって、それが非常に伸びることで、関連の産業がさらに伸びていくのではないかと思う。漁業では、佐賀大学や西九州大学とも一緒に仕事をやっていく部分があるが、結果として、なかなか、新しい商品の開発、新しい技術、新しい新規の起業家が出てくるところまで至らないことが結構ある。話し合いを始めても成果まで辿り着けないという事例が結構多い。一つの事例として、西九州大学の安田先生といろいろと協議をして、有明一番という海苔を作って、運用しているが、これが定価をつけて売り出しているという意味では、販売まで行き着いており、非常に特長的である。しかし、それ以外は、協議はするが、結果が伴わずに、

中途半端で終わってしまい、結局、関わった学生も、関心を持たないまま他所にいてしまうということがあります、非常にもったいないと思っている。是非、地元の大学と、一次産業のつながりの中で、何らかの成果をあげられるような、事業、計画を具体化していただければと思う。

先日、佐賀大学農学部出身の方で、IT関係のドローンを飛ばして、農業の病害虫を発見する特許を取られて、孫正義さんから褒められた学生の方がいる。その方が、佐賀を地元にして、東京に支店という形にされており、漁業に対する接触が非常に強い。一般企業の段階になってしまうと、結構離れたりしてしまうが、学生時代からそういうことをされており、在学時に接触が全くなかったのは、残念な部分もある。そういう意味では、大学と一次産業のつながりを更に強めていただければ、佐賀のいろいろな関連分野の産業もさらに発展していくのではないかと思います。

また、どうしても海苔の場合も、漁業者の減少、高齢化が進んでおり、一部の地域では企業が本格的に漁業に入り込む動きが少し見えてきているが、そのような一次産業と企業とのつながりを、佐賀県と市の考え方・進め方で強めていき、その中に、一次産業に関わる地域の人たちを、雇用をして活かすことができるのではないかとということを検討していただければ、また違う方向に伸びていくのではないかと考えている。

溝上委員

事務局に、3つお願いがある。一番目は、10年先のビジョンを掲げて、これからの10年があると思うが、10年前、若しくは15年前にもこのような話があったような気がする。この機会に、どうして10年間あまり変わらなかったのかを、もう一回深く分析・検討をしていただけないだろうか。なぜ、これまでできなかったのか、その中から、一つこれからの上手くいく理由が見つかればありがたいので分析をお願いしたい。

2点目はこれから To do の話になっていくときに、何をやるかではなくて、何をやらないかを定めることが、成功する方法・考え方だと思っている。例えて言えば、家具を新しく購入するときには、前の古い家具を廃棄しなければ部屋には入らない。いくらいいものを買ってきて、家を建て直す以外、家具は入らない。そのため、その古い家具を廃棄するという発想がないと、新しいものは望めないと思う。しかし、それはリスクが伴うので非常に勇気がある。リスクを取らないということは、何も成功にはつながっていかない。上手くいくためには、リスクを負うような企画・提案をしていかないといけない。野球の話でいうと、野球のコーチが、次のバッターに、「お前今度ヒット打てよ」というようなアドバイスされても、100%正しいが、これはまったく意味のないアドバイス・企画であり、それは企画を立てたものがリスクを負わないからだろうと思う。私がコーチだったら、次のバッターに「あのピッチャーは勝負どころでは、カーブを投げてくるから、カーブを狙っていけ。」と言うと思う。しかし、カーブが来るとは限らない。そういうリスクを負わないとカーブ、若しくは何でも打てるバッターはいないので、そういうことが大事だと思う。正しいアドバイスや意見を一杯言っても意味がない。「ヒットを打て」というのは、100点満点のこれ以上ないアドバイスだが、実際は意味がなく、効果は出てこないと思う。

だから、これから事務局には、是非、何をやらないかを定めることと、リスクを負ってもらいたい。責任を取れとまでは言わないが、リスクを負わないと、総花的に全てではできないのだから、しないことを決め、そのことに対する批判が必ず来るので、それを受けて立ってほしい。当然、

やって欲しい人、やって欲しくない人が、一杯いるので、全部の声を聞いたら何もできないので、そのリスクを負う気持ちで事務方にはお願いしたい。

杉山委員

総合戦略に書いてあるもの全ていいことだと思うが、全てをやるのは、分散することになるので、お金と知恵も集中しない。結果も非常に低くなると思う。各地で地域のコミュニティが守れないなど、様々な問題はあるが、地方、特に田舎は、人がいないというのが一番大きな問題である。何かやるにしても、人がいないと何もできないというのが現状である。本来は、パイの奪い合いより、パイをどう増やすかというのが一番大切だと思う。特に他の自治体でも、結婚させる、子どもを産んでもらうということに熱心に取り組まれているところがあるが、私もそこが一番大事ではないかと思う。高齢の人たちの仕事をどうするか、いかに新しいものを生み出していくかとうところに力を入れていくべきではないか。人が増えれば産業も増えるし、それに伴い商品も増えていくので、基本的に経済は活性化していくということになるが、そういったところに知恵とお金を集中して、全てをやるのではなくて、どこかに特化して、他の自治体がやらないような、思い切った政策をすることが大事だと思っている。

会長

選択と集中ということで、非常に難しい話ではあるが、貴重なご意見だったと思う。取りとめもないが、いろいろなアイデアを出していただいた。4つの柱ごとに、雇用、一次産業を含む産業、それから定住、子育て、子どもを増やす、交通というところあたりが、大きな関心事項だったのではないかと思う。来年になるが、この柱ごとに、どのような形で、どのような「佐賀らしさ」があるかを含めて、まとめていければと考えている。次回それぞれのテーマごとに、今日の見解を踏まえて、少し整理したうえで、アイデアを投げ込みたいと思うので、よろしくお願いしたい。

以上